『グローカル天理』創刊号掲載論文要旨

太田　登　「天理教原典とやまとことば（1）　その表現論的意味をめぐって」

天理教の原典「おふでさき」は、やまとことばによって書かれた言語的表現として読みなおす必要がある。例えば、「社」と「屋敷」ということばも改めてやまとことばとして捉えなおすべきだろう。また「から」と「にほん」という対比は、当時の民衆にとっては象徴的概念 ではなく、もっと具体的で理解しやすい諭しであったと考えられる。

笹田　勝之　「天理教における悟りの構造について（1）　他宗教との比較を通して」

宗教は「覚」つまり「悟り」の宗教と、「信」の宗教の二つに分類されるという。この連載では、天理教の「さとり」 の構造について論ずるために、その語源をたずね、教祖（おやさま）の「さとり」の用語法から語義を整理して、天理教と他宗教の「さとり」を比較する。また 「啓示」と「悟り」の構造の異同について、特にキリスト教の「啓示」を比較参照しながら考察していく。

井上　昭夫　「天理異文化伝道の諸相（1）　天理異文化伝道学構築の意義」

天理教の海外伝道は明治２０年代に始まり、ほぼ全世界の文化圏に及んでいる。それらの異文化における伝道者の貴重 な体験知・実践知を学問的に集約した異文化伝道論は、宗教と異文化間コミュニケーションの学問的研究分野に新たな一石を投じ、国際化する社会における自文 化と異文化の正しい理解、真の助け合いによる人類共生の智恵となる。

佐藤　浩司　「天理教東南アジア伝道誌（1）　東南アジアへの道」

天理教の海外伝道は 1893 年の韓国伝道が嚆矢と言われている。それから約 10 年後には東南アジアへの伝道が始ま るが、最初の教会設立を見るのは 1922 年のシンガポールにおいてである。その後各地に布教が広がり、教会も設立されていったが、日本の敗戦によって、こ の地域での伝道は頓挫した。しかし、戦

後 20 年を経た頃から東南アジアに対する認識が高まり、幅広く伝道活動が展開されてくる。

金子　昭　　「天理経営学－その歴史・哲学・展望－（1）　天理人間学としての天理経営学」

この連載で、天理教信仰者がいかに教えと現実の経営を両立させてきたかを紹介し論評する一方で、諸宗教の経営論、 経済論も紹介し論評していく。現状分析と未来予測による探究から、宗教と経営、天理と倫理、利他と利己、利潤追求と社会貢献、地域と地球、経済発展と環境 保全を「二つ一つ」に統合していこうとする天理経営学が見えてくる。

佐藤　孝則　「エコロジーの思想と実践（1）　「生態学」と「エコロジー」運動」

英語の ecology は、「生態学」と「エコロジー」の二つに分けて翻訳される。前者は主に自然界の生物に重点を置いているのに対し、後者は自然界に対する人間側の関わり方に 重点が置かれている。近年世界的な高まりを見せるエコロジー運度は、基礎的研究に専念する生態学にから離れ、政治的志向を目指す流れと、倫理・宗教をめざ す流れに大きく二分されていった。

金子　珠理　「ジェンダー・女性学情報（1）　女性と宗教」

連載初年はジェンダー・女性学にとっての核心的な問いであり、またそこだけに留まらない「マイノリティの声」をめぐる諸問題を学際的に扱っていきたい。その手始めとして、今回は「女性と宗教」を巡る日本の研究状況を概観する。

小滝　透　　「天理比較神秘論への試み（1）　はじめに当たって」

天理教神秘主義の在り方を探る上で、イスラームとの比較対照を行う。天理教は天地創造を行った絶対神を戴き、この 世の全てが神の法則によってコントロールされているという世界観を持っている点では、イスラームの神（アッラー）に似ている。しかし、その神の属性や対人 間関係や対自然関係においては決定的に相違している。

小林　正佳　「芸術・癒し・宗教（1）　創造と治癒」

治療としての「芸術療法」と、純然たる「芸術活動」には、ずれが生じることがある。しかし、この両者の位相の違い を念頭にとどめながらも、尚、両者を同一線上で捉えてゆく視点を探る。さらに、フランスの修道院で起きた事例を紹介し、「芸術」と「癒し」に続く「宗教」 との関わりを考察する。

塩沢　千秋　「脳死・臓器移植ーカナダ通信（1）　命の流れ」

今までの医療にはない、人の心に痛みや不安を抱かせる臓器移植治療とは何であろうか。この治療では、臓器提供を受 けるために、病人が健康人の死を待たねばならず、「生きた臓器」確保の為に、医療技術の高度な発達の産物である「脳死」を、死の定義として積極的に適用す る。ここではカナダでの対照的な事例を紹介し、臓器移植医療の問題点を考察する。

深川　治道　「エコロジカル　インタビュー　環境マネジメントシステムと大学」

日本の大学において３番目の環境マネジメントシステム ＩＳＯ14001 認証取得校を目指している、京都精華大学を訪問した。第１段階の審査を終えた同校の、そこに到るまでの道のりをレポートする。

上杉　武夫　「都市の再生に向けてーアメリカ通信（1）再生の都市理論」

２１世紀はサステイナブル（持続可能／共生的）又は、リジェネラティヴ（再生的）が、の生活スタイルのテーゼにな るだろう。カリフォルニアにおけるそのような環境づくりやライフスタイル構築の具体的な事例をいくつか紹介し、２１世紀の持続可能な都市づくりには伝統的 な産業社会から脱却した思い切った発想の転換の必要性があることを述べる。

小椋　博　　「宗教・スポーツ・賭け（1）　賭けと聖なるものー遊びの視点から」

「聖ー遊ー俗の理論」をもとに、ギャンブル・賭けの意味を、遊び（遊）と宗教（聖）を関連づけながら考察する。楽 しむという点においては、遊びと共通

するスポーツや音楽によって、聖なる領域を体験することがある。世俗化が進行し宗教的な聖なる時間と空間が縮小するこ とから、人間は遊びを通して聖なる体験を求めるように動かされているのではないだろうか。

（論文掲載順）